

## WINDS CAFE 285 in 原宿

### “ロック・アバンギャルド・コンテンポラリー”

日時 2020年9月27日(日)  
開場 14:00 開演 14:30 ※事前予約制

場所 CASA MOZART  
(JR原宿駅下車 徒歩5分)

出演 ヴァイオリン: 迫田圭 ピアノ: 宮阪優奈

入場料 無料(投げ銭方式)

### Program

木下正道	すぐ傍らのもの XI(初演)
<b>Kurtág György</b>	<b>Tre Pezzi</b>
間宮芳生	無伴奏ヴァイオリンソナタ

### Intermission

迫田圭	ヴァイオリンソナタ第3番(初演)
<b>Vytautas Barkauskas</b>	<b>Partita for Violin solo</b>
<b>Nikolai Kapsutin</b>	<b>Violin Sonata</b>

本日はご来場いただき誠にありがとうございます。このような状況にも関わらず演奏会に足を運んで下さり、本当に感謝いたします。

僕はソリストとしてお客様の前で演奏するのはおよそ半年ぶりになります。自粛期間を経て、音楽を奏でる喜びを噛み締めながら演奏させていただきますので、楽しんでお聴きいただけますと幸いです。改めて開催して下さった川村さんをはじめ、関係者皆様方とお越しいただいたお客様方に厚く御礼申し上げます。

### 木下正道　すぐ傍らのもの XI

「すぐ傍らのもの」は、短い独奏曲のシリーズとして、普段お世話になっている演奏家への「小さな贈り物」のつもりで作曲しています。我々は普段、注意を凝らして周りの世界に接していると思いがちですが、実際はそうでもありません。普段あまり存在を主張せず、何気なく在るものには得てして気づきません。その「何気ないもの」をさっと取り上げて、可視化、可聴化しようというのがこのシリーズの更なる狙いでもあります。

ヴァイオリンのために書いたこの「IX」は、昨年初演されたホルントリオで展開した技術、例えば開放弦の積極的な使用や、同音でのグリッサンドなど、地味ながら難易度の高い技術をふんだんに取り入れつつ、全体としては熱気と活気に満ちた、激しい音楽を目指しています。時々その熱気に冷や水を浴びせるように、短い「歌」が挿入され、音楽としての持続を作ります。

(文 木下正道)

### G. クルターク 3つの小品

ルーマニア(旧ハンガリー)出身の作曲家。1924年生まれ。まだ存命中の現代作曲界の巨匠である。彼の作品は極めて直感的かつシンプルなものが多い。本作品も例外ではなく、第二楽章以外は音の長さの支持が曖昧で、奏者のセンスに任せられる部分を大切にしている印象を受ける。

音数はとても少ない上、各楽章もそれぞれ短いですが、それにより彼独特の世界観を表現している。

## 間宮芳生 無伴奏ヴァイオリンソナタ

1929年北海道生まれ、青森県育ち。クルタークと同じく90歳代だが、日本を代表する現役バリバリの作曲家だ。彼の作風は非常に多岐に渡り、説明するのが難しい。作品ごとにガラッと作風が変わるものの、共通点を挙げるとするならば、大半の作品にて東洋的な節回しを多用しているところだろう。また、映画音楽や合唱曲の分野でも多くの作品を残しており、幅広い層に親しまれている。

この「無伴奏ヴァイオリンソナタ」は間宮作品の中では前衛的な作品だ。ヴァイオリンという楽器の可能性を様々な角度から追及した問題作である。

現代的な切れ味の鋭さの中に東洋的なフレーズが垣間見れたり、どこことなく呪術的な要素があったり、はたまた素人が演奏しているのでは？というような音響効果を求められたりと、様々な表情を見せてくれる本作品は問題作ではあるものの、無伴奏ヴァイオリンのための20世紀を代表する傑作であると思う。

## 迫田圭 ヴァイオリンソナタ第3番

本公演のプログラムを決めるにあたって、悩みの種が一つだけあった。それは最後に演奏するカプースチンの作品と他の作品とをどう繋げるか。散々悩んだ末、作曲しようということになったのだが、そもそも自分に繋ぎの役割を果たすような作品を書くことができるのかという問題に再びぶち当たる。色々悩み、さらには自粛期間のうっぴんもあり、怒りと葛藤に身を任せて作曲した結果、何故だかとても能天気な曲になってしまった。

全体を通して古今東西のいろいろな名曲が散りばめられているため、退屈してしまったら名曲探しをしながら聴いてみるのも面白いかもしれない。

果たして繋ぎの役割は果たせただろうか。全2楽章、リラックスして聴いていただけたら幸いです。

## バウカウスカス 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ

1931年生まれのリトアニアの作曲家。親日家のようにたびたび来日しており、「日本のシンドラ」と呼ばれる杉原千畝氏に感銘を受けて作曲された二重協奏曲が代表作として日本では知られている。

本作品は12音技法という近代的な作曲法で書かれているものの、かなり自由な解釈で使用されており、比較的ポップな仕上がりとなっている。

緩、急、緩、急、緩の全5楽章形式。

## カプースチン ヴァイオリンソナタ

1937年、ソビエトに生を受けたカプースチンは、今年7月に亡くなるまで非常に多くの作品を世に残した。現代の作曲家の中では一二を争う人気作曲家で、その人気ゆえにBGMとして街中で耳にする機会があるほどだ。

自身が大変優秀なピアニストであったため、ピアノのための作品が数多く、高度な技巧を求められる作品が多いが、そのどれもが非常に高い演奏効果を有している。

ヴァイオリンソナタも例外ではなく、ヴァイオリンはもちろんのこと、ピアノに求められる技巧は相当なものであり、二者が競争するようなアンサンブルによって躍動感のある楽曲に仕上がっている。特に目まぐるしく動くピアニストの指捌きに注目していただきたい。

●迫田圭 (さこだ・けい) : 東京音楽大学大学院に給費奨学金を得て入学、修了。東京音楽大学コンクール入選、第28回市川市新人演奏家コンクール弦楽器部門最優秀賞。ロリエ弦楽四重奏団としてプロジェクトQ第10章に参加。若手作曲家の新作初演にも数多く携わっており、サントリーサマーフェスティバル内の芥川作曲賞選考演奏会ではソリストを務める等、精力的に活動している。現在、おーけすとら・びとれ座コンサートマスター。オーケストラトリプティークメンバー。Malus Quintetメンバー。green room playersメンバー。

●宮阪優奈 (みやさか・ゆうな) : 北海道出身。東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業、東京音楽大学大学院修士課程鍵盤楽器研究領域(伴奏)を首席で修了。N響のそうか土曜クラシック、恵比寿 WE LOVE MUSIC inc salon. コンサート、北広島市芸術文化ホールロビーコンサート等ソロ・室内楽において多数の演奏会に出演する他、アンサンブルピアニストとしても各方面から多くの信頼を寄せられている。

万里の長城杯国際音楽コンクール、日本演奏家コンクールにて伴奏者賞を受賞。全日本学生音楽コンクール北海道大会本選にて過去3度入賞、第22回鳥栖フツベルピアノコンクールフツベル部門(大学・一般部門)本選入選等、数々のコンクールにて受賞。また、フランスにてMusicAlp 夏季国際音楽アカデミー・ティニューを受講。受講生選抜演奏会に出演。これまでにピアノを佐藤睦美、北島公彦、橘高昌男、植田克己、佐藤俊、石井克典、村田理夏子、パスカル・ドゥヴァイヨンの各氏に、伴奏法・室内楽を山洞智、土田英介、門脇大樹の各氏に師事。イタリアにてレオニード・マルガリウス氏から薫陶を受ける。

東京音楽大学ピアノ伴奏非常勤研究員を経て、現在、同大学付属幼稚園ピアノ教員。

<https://twitter.com/yunamiyasaka>